

一日前プロジェクト

もし、
一日前に戻れたら……



私たち(被災者)から
みなさんに伝えたいこと

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方々や災害対応の経験をもつみなさまにお集まりいただき、

- ◆ 被災直後の行動
- ◆ 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ◆ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- ◆ 日頃から何を準備しておけばよかった

といったお話を聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話を小さな物語(エピソード)に取りまとめる活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約350の物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<http://www.bousai.go.jp/km/>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください！きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

津波の「つ」の字も知らなかった

22歳のときです。私は外国航路の船員をしていたのですが、戦争中に会社の船がやられましてね。復員*してきたものの、乗る船がない。それで、この田舎で青年団活動なんかに参加していました。

当時、テレビはもちろん、娯楽が全然ないものですから、青年団が集まって村芝居をやっていましたね。地震が起こる前の晩も遅くまで練習をしていました。

血気盛りの青年ですから、真冬でも越中フンドシで夏のゆかた、これが寝間着の定番ですわ。で、午前4時ごろ、寝ている時にグラッときたんです。

後で調べてわかったことですが、この「南海トラフ」を震源とする地震は、必ず津波をとまなっているんです。それに、今まで、だいたい100年周期でやってきている。その100年がすぐそこに来ているにもかかわらず、私はそのとき津波の「つ」の字も全く知らなかったんです。話で確認できると判断に間違いがないですね。

*復員とは、招集された軍人が任務を解かれて家庭に帰ること。



早く逃げれば良かった

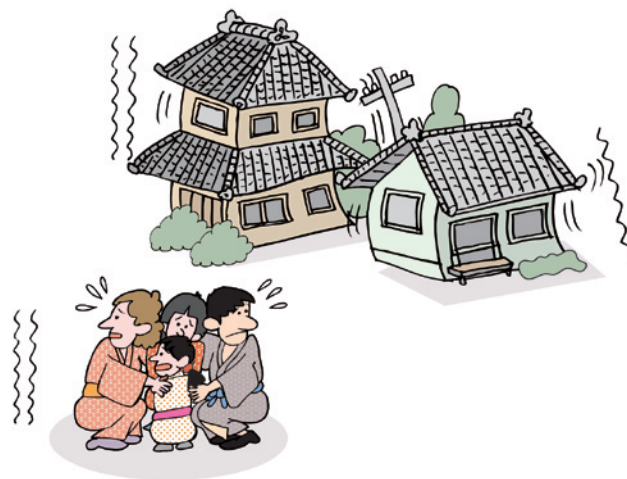
当時私は16歳。寝入りばな、体を揺さぶられたような気がして目が覚めました。横に姉が寝ていたから、起こそうかと思ったけれど、たいしたことないだろうと思ってね。

しばらくしたら、すごい揺れがはじまって、「家がつぶれたらたいへんだ」と父が言って、素足のまま、親子4人が外へ飛び出しました。

ものすごい揺れだったから、とても立っておれなくて、4人がお互い体を支えるようにして、道路の上へ座ったんです。外は真っ暗で何も見えませんが、家がギシギシ音をたて、「これ、止まるのかなあ」って思いました。

で、ようやく揺れがおさまった時、逃げればいいのに、寒いからと、またみんなで布団の中へ入ったんですよ。それから1、2分ぐらいでしょうか。男の人の声で、「津波が来るぞー」と2回聞こえたのです。父が「早う逃げなんたら、あかん」言うて、親子4人が家の玄関の戸をあけたときには、もう腰まで潮が来ていました。

今なら、布団にもどってしまうなんて考えられませんが、親も津波の経験がなかったからだと思います。



必要だった火山の知識

～噴火後からでも学習を～

記者としてほんとうに悔しいのは、平成3年の6月3日に大火砕流*が発生して、多くの方が犠牲になるまで、私自身、恐いと思ったこともないし、危機感が全然なかったということなんです。

実は、その数日前に、大学の先生に、「記者さん、マスコミが今いるあの場所は、もうほんとうに危ないよ」と言われたんです。そんなにきつい調子ではないけれど、「ほんとうに危ないから、下がりなさい」と。

その「危ない」という言葉を、「そこにいたら死ぬんだ」というふうに置きかえて理解できなかったのは、火山に関する基礎的な知識が不足していたからだと思います。平成2年の噴火以来、あれだけ時間があつたのに、私たちは火山のことを勉強していなかったのです。

今なら、噴火前の煙があがっているだけの状態であっても、先生の忠告に耳をかたむけることができる、そんな気がします。



*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。

まず老人会の会長さんをひっぱり出し

～地域の役割のある人から声かけ～

私は自治会長だったので、地震の前の晩は夜中の1時半過ぎまで、なれない手つきでワープロでまちづくりに関する資料づくりをしていました。

ちょうど寝入りばなに、グラグラと大きな地震が起きたのです。表に出ると、となり町の空に真っ赤な火の手があがっていたので、「これはあかん」と思いました。そのあたりには、昔ながらのアーケードにつらなる市場があったので、そこに火が入ったら、アーケードに火が走ってすぐに我々の町に来るだろうと思ったのです。

自治会長の私だけでは、どうすることもできないと思って、地域の老人会の会長さんや、婦人会の会長さんとかに声をかけました。その人たちがそれぞれ自分の担当で動いてくれるだろうと思って声をかけたのですが、期待どおりしっかり行動されていました。

自分は何度か火災を経験し、火の怖さを十分知っていましたので、「早く、火に近いところから助け出さなければ」と思っていました。埋もれている人の掌握にと、町を二回りしたころには、すぐそこに火が来ていました。ほんとうに火の勢いは速かったんです。



2階で寝ていて助かった

～逃げ出す時に切った足、入浴時に気づく～

たまたま私たちは2階で寝ていたから助かったけど、下で寝ていたら完全にやられていたと思います。1階の天井が完全に落ちて、2階部分が1階のようになっていましたから。

主人が、枕元でライターをつけてくれてね。ライターで照らしながら、「入り口が開いとるから、先に出る」って言ったけど、2階の窓の棧やガラスが全部飛んでしまって、入り口に見えたのだろうと思います。

ちょうど私たちの寝ている枕元にコタツがあって、こっち側にあんま器があって、反対側に大きなテレビ。そのテレビとこたつとあんま器に天井が支えられていたので、私は主人が引っ張り出してくれたガウンをパジャマの上にはおり、スリッパをはいて、はって出ました。背の高いタンスは山側に倒れてくれたので、運良く、下敷きにならずにすみました。



その夜、難を逃れた妹の家でお風呂に入ろうとしたら、服がくっついて脱げないのです。

おかしいなと思ってみると、太もものあたりが切れて血が固まっていた。地震で落ちた人形ケースのガラスがふとんに突き刺さり、中の羽毛が空中に舞い上がって前が良く見えないほどでしたので、それで切ったのでしょう。割れたガラスは本当に怖いものだと思います。

ご近所で「あげます」「いります」

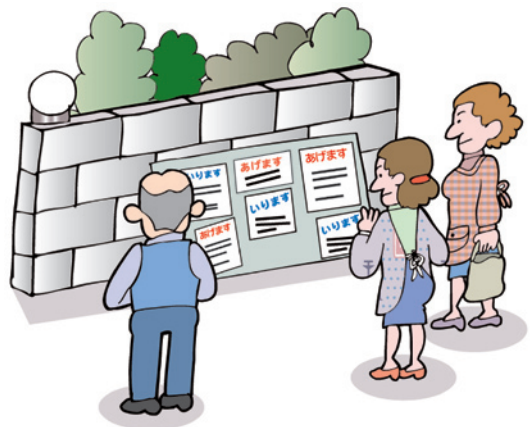
～玄関前にボードで貼りだし～

地震後、家の中を片づけるのに大変だった時期に、近所の十数家族で避難所になった近くの小学校に、交代でみんなの朝とお昼の菓子パンを取りに行っていました。初めから決めていたわけじゃなくて、奥さん方が「今日は私が手伝います」、「じゃ、次の日は私が手伝います」って自主的に言ってくれたのが始まりでした。

しばらくたってから、家の前に厚いベニヤ板を出して「こんなものが役立つよ」とか、「こんなものが余っているから使わない?」とか書いた紙を張り出すようにしたら、お互いにないものをスムーズに供給しあうことができました。

うちは、きれいな水の入ったポリタンクを外に出しておいたのですが、どこからか情報を聞いて、「うちのおばあちゃんが薬飲む水がないんですけど、いただいいていいですか」とか言って来られるんです。煙やらで、のどがむせたりするとやっぱり水が欲しくなるでしょ、みなさん寄ってきて、最後は犬までできましたよ。

私は、引っ越してきて1年2カ月ぐらいで、近所とは顔見知りになっていましたが、もうちょっと広い範囲に住む、初めて家の名前も知った人たちと一緒に力を合わせる事ができて、とてもうれしかったです。



ぬいぐるみ抱えて母のもとへ

あのときちょうど、僕は小学1年生でした。寝ていたら、急にドーンという大きな音がしたんです。その音で目が覚めると、何か地鳴りみたいなものがこっちに近づいてくるような、ゴゴゴという音がどんどんどんどん大きくなってきて、それからまたドーンという音がして、突き上げられるような揺れを感じました。

僕は、2段ベッドの下に寝ていたんですけども、何が起こったのか全くわけがわかりませんでした。ただ、何か大変なことが起こったということだけはわかったので、一緒に寝ていたシャチのぬいぐるみをわきに抱えながら、必死で母親のもとへ行きました。

たまたま僕の家は、建ててまだ1年も経ってなくて、地震に強かったんですね。家の壁とかにヒビは入ったけれど、タンスとかも倒れなかったし、食器は何枚か割れたりはしたんですけども、食器棚の観音開きの扉は、磁石が結構強力で開かなかったので、中の食器が飛び出すこともなかったのです。

部屋の中は、本棚から本が飛び出したり、しまってあった物が全部外に出たりして、足の踏み場がないほどでしたが、ガラス類が落ちて割れることはなかったので、ケガをする心配もありませんでした。



再現映像で震災の光景一気に思い出す

地震から数日後、小学1年生だった私は、おじの家を見に行くという父についていきました。電車は止まったままでしたから、「線路が一番広くて安全」ということで、途中まで線路の上を歩いて行きました。普段は入れない線路の上を父と手をつないで歩いたので、安心なのと楽しい気持ちだったことを覚えています。被災後は、いつもは仕事や大学で帰ってこない父親や兄と、毎晩のようにトランプをしたりして、私にとってはある意味で望んでいた日常でした。

その私が、神戸の「人と防災未来センター」で震災直後の再現映像を見たときに、2駅分の線路を父と歩きながら見た一番生々しい光景を一気に思い出し、気を失って倒れてしまったんです。

行く手の向こうには火の手が見えていて、おじの家にたどりつくくと、周りの家はほとんど焼け落ちてガレキ。人々が道路で固まって暖をとったり、公園のテントの横でたき火をしていたり、いつもならいないはずのおとなたちが、そんな所に集まっているというのがすごく衝撃的でした。6千人以上の人々が亡くなったという現実がわかる高校生になって、いきなり思い出してしまったので、「自分は何ていうものを見たんだろう」と。

それだけの人々が亡くなった中で、自分が生きのびて、これから何をしたらいいのかなと考え、大学のサークルなどで震災の経験を伝える活動に関わることになりました。



家具は倒れず ～役立つ転倒防止グッズ～

ご飯をよそって出して、みそ汁を持ってこようと思って立ち上がったときに「ドン」と来たんですね。アッと思って、とっさに私は食器棚を押さえ、お父さんがあちから、テレビを押さえました。

食器棚は、観音扉*を少し太めのゴムでとめていました。そのゴムが伸びて、中のものが少し飛び出しましたが、たいしたことはありませんでした。

それから、今度は仏壇の花が心配になって走っていったのですが、ふっと庭を見ると、道路に面したうちの岩塀が倒れていました。

たんすとか本棚とかは全部、前々からゴムみたいな転倒防止用のやつを買って、下に入れてあったんです。だからぜんぜん倒れなくて、助かりました。

*観音扉とは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



全戸に配った手作りの「井戸マップ」

あの地震は、たまたま局地的だったですけれども、あれが広範囲だったら大変ですよ。被害がこの辺だけだったので、ちょっと車で5分、10分走れば、何でも買ってこられたんですよ。もし宮城県沖地震なんかが来れば、宮城県全体がある程度被害を受けるから、大変なことになると思いますね。

何と言っても、最後は水がないのが一番困るんですよ。それで、私たちの防災会では、井戸がどこにあるのかが一目でわかるマップを作って、町内267戸全戸に配布したのです。ラミネート*をかぶせて長持ちするようにして。

ここで肝心なのは、「もしもの場合は、どなた様も来てくださいね」と言ってくれている家だけを地図に載せているところです。それがイヤだという人のところは、井戸がないことになっているわけで、ちゃんと了解をとっているんですよ。

自分は建築事務所をやっているから、製図用のコンピュータソフトを使って地図づくりを手伝いました。少しは役に立てたかなと思います。

*ラミネートとは、ラミネートフィルムという透明なシートのこと。



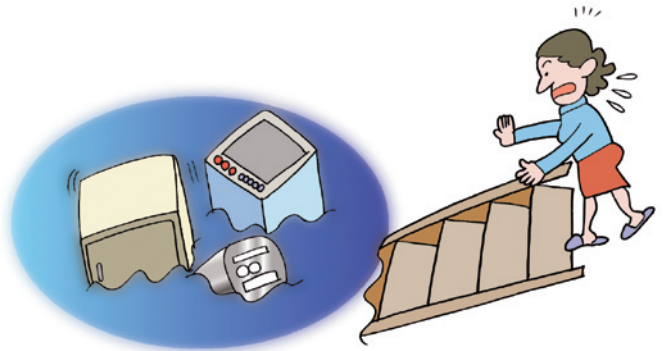
冷蔵庫も洗濯機も浮いていた

川が決壊してからは早かったですね。ほんとに一瞬の出来事というか、水が玄関の中に入って、「入ってきたよ！」って子供に言われて、「じゃあ、荷物をとっとと上げなきゃね」と言った時には、もう水はヒザより上の高さでした。

それからあっという間に、裏の川からどんどん水が流れてくる。台所のほうが湿ってきちゃって、「これはやっぱり上がってきちゃうのかな」と思ったのが午前11時過ぎ。息子たちに手伝ってもらって、体操着から布団までみんな二階に上げた頃はお昼を回っていました。

子どもが「腹減った」というので、おにぎりを食べさせて、テレビをつけたら、避難するところが大分増えていましたが、まだ私たちの町名というのはないんですよ。

じゃあ、うちだけがひどいのかなと思って、2階から外を見ていたら、ミシミシと音がしてきました。何かと思って下を見ると、たんすが倒れ、畳も冷蔵庫も洗濯機もみんな浮いちゃっていたんですよ。そうなったら、もう階段を下りられるような状態ではないんですよ。階段の下から4段、5段まで水が来ていて。それが午後1時半過ぎたころだったと思います。



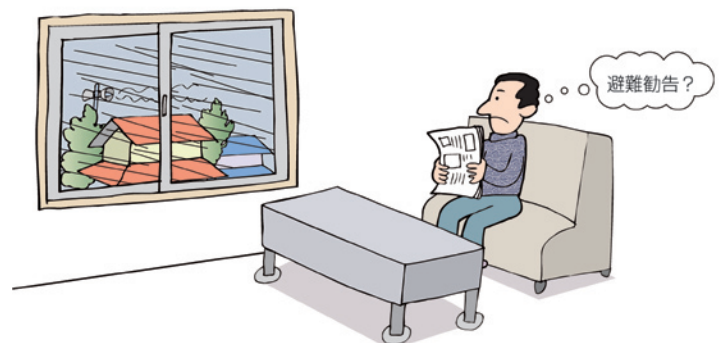
のんびり聞こえた「避難勧告」

～緊迫感なかった防災無線～

夜になって防災無線が入ったんですが、何とものんびりした感じなんですよね。おとしよりのためにゆっくりしゃべるといふこともあったのかもしれませんが、何だか避難命令という緊急性とはかけ離れているように思いました。

もう家の玄関のところに水が来てしまっているのに、「避難勧告が出ました」とペラっと緊迫感のない声で言っているだけなんです。もう少し大きい声で、大変な状況になっているということが伝わってくるような調子で言ってもらえば良いのにと思いました。

情報の伝達にもスピード感がほしいですよ。昔は地区の消防団などを介して、近くの川の水位が今どのくらいになっているというような情報が、すぐに家々に伝わって来たものです。防災無線のリアリティーのなさもそうですが、もうちょっと地域の情報がすぐに伝わる仕組みが必要ですね。



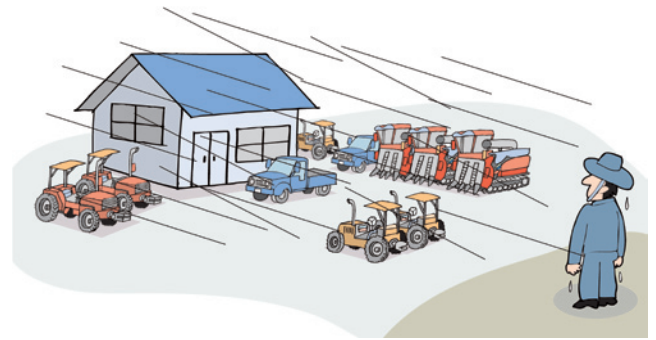
水没のコンバインまで保険でカバー

そのあたりは昔からよく水がつくところと承知していましたから、うちの事務所は、田んぼから4メートルぐらい高い位置に建てていました。すぐ横に流れている川の堤防よりも高いので、堤防が切れても大丈夫だと思っていたのです。

けれど、夜の9時ごろになってますます雨と風が強くなり、心配になって会社のようすを見に出かけました。その頃には、円山川本流につながる川の水が、下流側から上流にもものすごい勢いで逆流していて、まるで津波のように立ち上がっていたのです。さすがに、「これはちょっとおかしいな」と。

はっきり覚えてはいませんが、堤防が切れたのは10時半ごろだったと思います。それからは考えられないほどの速さで水が押し寄せてきました。会社には、トラクターとか、2トン車とか、軽トラックとかが、いっぱい置いてあったんですわ。それも5台や6台じゃないんですよ。

ただ、運の良いことに、その年の4月に、保険を火災保険から総合保険に全部切りかえていたんですよ。農協さんから「新しい保険が出たから、どう？」って言われてね。すぐにはそのことに気がつかなかったぐらい混乱していましたが、水没したコンバインなんかもすべて保険でカバーできて、ほんとうに助かりました。



地震のショックで思考停止

～声出す人がリーダーシップ～

自衛隊のヘリが来るまでは、みんなで廃校になった小学校のグラウンドに避難したんですけど、やっぱりショックが大きくて、そこに行くにもだれかが先導しないと動けないという状態でした。声を出す人が2人くらいいないと絶対動けないんですね。何をどう考えていいかわからないという感じ。だから、自分と友達2人で、いったん村を捨てようという決断を皆にさせようと相談してから、「ここで寝てくれ」とか指示をすると、全員いい子になってついてくるんです。人の思考回路というものがなくなってしまうかのように。

「それは結構怖いことだな」、「もし自分たちの判断が間違っていたらとんでもない方向にいったかもしれないな」と、後で友達と話をしました。その後3日目くらいからやっと個々に文句を言うようになってきました。「これは意識が戻ってきたね」と。自分たちもしっかりしていたつもりなんだけど、相当変にはなっていたと思うんです。

5日目ぐらいになると皆さん自分の意思表示ができるようになったというか、「おまえらみたいなのに指図される筋合いはない」という声がいっぱい出てきて、これはもう大丈夫だということで、村の区長さんたちにバトンタッチしました。



高い食器を二度割った

地震が起きた日はちょうど日曜日で、主人はゴルフに行っていました。

私は家にひとりぼっちでした。で、着替えてソフトバレーボールの練習に出かけようとしていたら、ワーンと揺れて、うちの食器棚は観音開きだから、扉が左右にダーッと開いて、中の食器がバーッと飛び出しました。

割れた食器を見たら、いつもわりといいのを食器棚の手前の方に置いてあるから、コーヒーカップのセットやらクリスタルのグラスやらが落ちて粉々でした。それに、主人の退職祝いでもらった高い花瓶も割れてしまっているんです。「ああ、残念だったな」と思いました。

なもんで、そんな私をかわいそうに思った友達が、1回目の地震のあと、いくつか食器を持ってきてくださったんです。けど、1ヶ月後の2回目の地震のときに、それもまた割ってしまいました。

最初の地震で大事なものを割ってしまったから、しばらくは食器棚の扉が開かないようにヒモでくくりつけていたのに、1ヶ月たったらもう忘れてるんです。



最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所

避難所に来た皆さんは、最初はお殿様かお姫様みたいに、じっと座っているだけなんです。私たち小学校区の役員が対応に追われているときも。同じ被災者なのにね。

そこで、「元気な方はどうぞ、一緒におにぎりを握ってください」、「お米を研ぐのを手伝ってください」とお願いしたら、若い人もお年寄りも我に返ったように、「それなら」と気持ちよく炊き出しの手伝いをしてくれました。

あれから、避難所にいる人たちの気持ちがひとつになったような気がします。だから、避難されてきた方々をお客様みたいにさせない方策、例えば必要な役割ごとにあらかじめチームを作っておいて、どこに何人配置するかを決めておく。避難者にも作業をお願いするということも考えておくことが必要じゃないかと思えます。



おとなりの井戸水もらえて大助かり

～トイレの「ジャー」は、バケツ3杯分～

水が出ないのが一番こまりましたね。うちは田舎なので家に井戸があって、これは助かったなと思ったんですけど、地震で井戸水のほうのパイプがやられてしまって、井戸水をくみ出すことができませんでした。で、何日間か、水道が出るまで、おとなりから井戸水をもらってしのぎました。

でも、いつも何となくやっているトイレの「ジャー」は、バケツ3杯も運ばなきゃだめなんですよ。

いつも洗濯に使う風呂の残り湯は、大きな揺れで、ガシャンガシャンと台所まで飛び散っていて、もう3分の1ぐらいしかありませんでした。

何が困ると言ったって、やっぱりトイレの水が一番で、おとなりから井戸の水をいただけたのは、すごくありがたかったです。



そんなところで寝ていちゃ、ダメ

～家具の配置に要注意～

前日の夜が仕事で遅くて、その時間までまだ寝ていたんです。最初軽く揺れ出して、「あ、また地震だな。まあ、いつものことだから」と思って、そんなに慌てもしなかったんですけど、すぐにクレーン車が何か突っ込んで来たんじゃないかと思うほどの揺れになりました。

で、あわてて、パジャマのまま、2階の部屋の窓から1階の屋根の上に飛び出たんです。「上から2階の屋根のかわらが落ちてきたりして、かえって危ないよ」とあとで人に言われたんですけど、その時は夢中でした。

私が寝ていた場所というのは、頭のほうにテレビが置いてあって、足元には冷蔵庫が置いてありました。やっと揺れがおさまって、振り返って自分の部屋の中を見たら、テレビと冷蔵庫が自分の寝ていた場所にドン、ドンと転がっていたのです。

それを見て、「逃げてよかったな」と思うと同時に、「そんなところで寝ていちゃいけないな」と思いました。



食料や物資はふだんから備蓄してないと

ちょうどコンビニに停めて、車のサイドブレーキをかけた瞬間に揺れ始めて、そのうちジェットコースターに乗っているような感じになりました。

直後でしたので、運良くコンビニに寄れて水とかおにぎりとかパンとか、当面必要な食料を買うことができました。コンビニは、お酒とかが割れて床が水浸しで、お酒の臭いが混じったすごい臭いがしました。

家に帰ったら既に停電していました。で、「ああ、ポリタンクを買ってくるのを忘れたね」と言って、慌ててまた買いに出たんですけど、「もう全部売り切れました」と言われてしまいました。

もう水もすぐにとまっちゃうような感じでしたから、ペットボトルの空いたのを一生懸命探して、買ってきた水と冷蔵庫にあったお茶とかで、復旧まで足りるのかなとすごく心配しました。

3年前の新潟県中越地震のときは水もガスも止まらなかったの、「何とかなるだろう」と、容器とかも全然そろえていなかったんですね。それが、ガスも、水道も、電気も全部とまってしまったので、「私たちはどうなるんだろう」という感じでした。

やはり、食料や必要な容器などは、ふだんから備蓄しておかないといけないなと思いました。



命綱つけて濁流の中を泳いだ

～おとしより救助も命がけ～

僕は社会福祉協議会の職員ですが、当時消防団員もやっていましたので、救助活動のために現場に行きました。そこはほんとうにすごい展開になっていて、「役場からの命令じゃないと動かない」と言っていたおじいちゃん、おばあちゃんが家に取り残されている状況でした。

水の流れが速くて、ボートをこいだら自分たちが流されちゃうぐらいなんです。で、僕は泳ぎがかなり得意なものですから、命綱をつけ、ボートのロープをもって、濁流の中を泳いで助けに行きました。なんとか無事に泳ぎきりましたが、普通の人には、絶対にしてはいけません。危険ですからね。

「とにかく乗りなさい」と言って、二人をボートに乗せました。おじいちゃん達は、とりあえず必要なものだけはビニール袋に入れていたが、あとは着の身着のまま。雨が激しくて傘をさせるような状態ではなかったの、ずぶぬれになりながらボートの上で不安そうにしていました。

近所の人々が避難するように言っても、かたくなに「もう、ここから動きたくない」という人がよくいますが、やっぱり避難は早めにしないといけませんね。



駅前はいつもと同じ、川の氾濫想像できず

～局地的豪雨の恐ろしさを感じた～

駅の近くで食事をしていました。確かにものすごい降り方でしたが、川が危険な状態になっているなんて全く想像もしていませんでした。

「ちょっとこの雨ひどいね」、「傘がないからもう少し待とう」と店に居続けたのですが、いっこうに止む気配がありません。

「もういかげんに帰らなくちゃ」と思っていたときに、携帯電話が鳴って、「今、川がすごいことになっている」という連絡が入りました。「どこが？」と。まさか自分たちの街の川があふれ出しているなんて想像もできませんでした。

普通に電車も走っているし、駅のまわりの店には明々と電気がついていて、街の生活のどこかが不自由になった印象は全くありませんでした。

川の近くに住んでいた人たちはすごい大変な思いをしているけれども、ちょっと離れたところでは、「えっ、川があふれていたの？」という、のんきな声が次の日も聞こえました。

都市部特有の局地的豪雨の恐ろしさを思い知らされた気がしました。



車の通行で二次災害

～水圧でガラス割れ～

水害のときには、ものめずらしさから見にくる人もいますが、4WDの車がありますよね、あれは水の中でもよく走れるものですから、すごい勢いで通って行くことがありました。ガラス戸が水に浸かった家では、車が通ったときに起こる波の水圧でガラスがみんな割れちゃったそうです。とんだ二次災害で、余計な出費になるものですから、「このやろう」と思うんですが、運転している人は気がつかずに行ってしまうんです。

うちも玄関ぎりぎりまで水がきて、「もうこれ以上来ないで」というときに車が通って、その波で床上浸水してしまいました。ほんとうに、車にはきてもらいたくなかったです。

でも、車で近づいちゃいけないというのは、地元の人じゃないとわからないから、交通規制とかをきちんとしてもらわないとなと思いました。



軽トラックの「おせっかい隊」が出前ボランティア

地域の川があふれて浸水被害が出ましたので、僕たちは日ごろから災害時のボランティア活動に備えていたので、すぐにボランティアセンターを立ち上げました。

ところが、2日間くらいほとんど依頼が来なかったんです。被災した地域を見ると、まだ片づけが終わっていないところがありました。で、「自分たちから声をかけていけばいいんじゃないか」ということになり、「おせっかい隊」というのをつくって、仲間と2人で軽トラックに乗って、町を回りました。

「ボランティアセンターってこういうのがあるんですよ」と言うと、「そんなのがあるんですか？知らなかったです」と言われました。行くところ行くところ、「こんなのあるんですか？」って感じで、庭の清掃やいろいろな頼まれるようになって、2人では手が回らなくなるほどでした。

「ボランティアやります」のチラシを回覧で回してもらったのですが、なかなか届かなかったからでした。中には、ボランティアセンターが閉鎖した後に届いたという家もありました。「情報を早く正確に伝えるのは難しいな」と痛感しました。



ドーンと音がして電車が横転

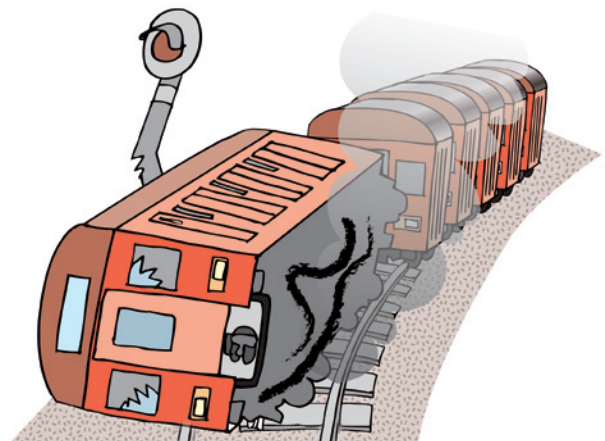
～瓦や角材が水平に飛んだ～

公民館の窓から外を見ていたら、グワっというものすごい音とともに10センチぐらいの角材が、南から北に向かって、瓦なんかと一緒に水平に飛んで行きました。それに、目の前の公園の植木なども音をたてて折れました。

それは信じられない光景で、アッという間のできごとでしたが、最後にドーンという音がしたので、何だろうと思って、外に飛び出て音のした方に行ってみると、列車が横転していました。

運転手さんの右手から血が流れていたのも、思わずアッと息を飲みました。「大丈夫ですか」と言ったら、さすがプロですね、「はい、乗客のほうも、我々乗務員も大丈夫ですよ」と言われまして、「ああ、助かった。偉いな」と思いました。

赤い車体の電車が脱線して横倒しになっているだけでもすごい絵なのですが、まわりを見渡すと、家の瓦から何からめっちゃめっちゃになっていました。それも竜巻のシワザとあとで分かったのですが、すぐには何が起きたのか分かりませんでした。とにかく、竜巻の力は想像を超えるものでした。



薬持ち出せず、避難所で大弱り

～自分の薬は肌身はなさず～

年寄りの人がたくさんおるでしょう。避難所に行って感じたのは、お年寄りみんな常にお薬を飲んでいるから、どんなときも自分の薬は肌身はなさず持っていなければいけないということです。

夜中の2時ごろ、おばあさんが避難所のすみでちょこんと座っていたので、わけを聞くと、「リュウマチで痛くて眠られん」と言うのです。で、連絡すると、すぐにお医者さんが看護婦さんと一緒に来てくれたんです。それにはほんとうに頭が下がりましたね。

先生が「これを飲んで」と痛み止めの薬を渡していると、それを見て「私にも薬をください」と言う人がいっぱいいました。引き出しに置いていたから、とっさに持ってこれなかったという人が多かったですね。だから、前もって何かに分けておいて、いつでも持って逃げられるようにしておかなければいけないとつくづく思いました。



「おやじ、避難しろ」で目がさめた

～気づいたら浮いた畳の上～

この地区では過去4回、床上浸水がありました。2000年の東海豪雨のあとで、行政が橋のかけかえや排水ポンプの設置など、いろいろ整備してましたし、家も1メートルぐらいかさ上げしていたので、もうある程度は安心だと思っていたんですね。

いつもなら、夜に雨が強く降ると気になって寝られないのですが、昼間に、下水があふれたところですぐに水が引くのを見ていて、何となく安心したせいもあって、うとうとと寝ていました。

「おやじ、避難しろ！」と2階で寝ていた息子に起こされたのは、夜中の1時半ごろでした。そのとき、すでに床上まで水がきていたのですが、私は気づかずに、浮いた畳の上に寝ていたわけです。

たぶん、川の水があふれたせいだと思いますが、またたくまに水がやってきました。

息子が起こしに来てくれたからよかったものの、そうでなかったら逃げ遅れてしまっていたかもしれません。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

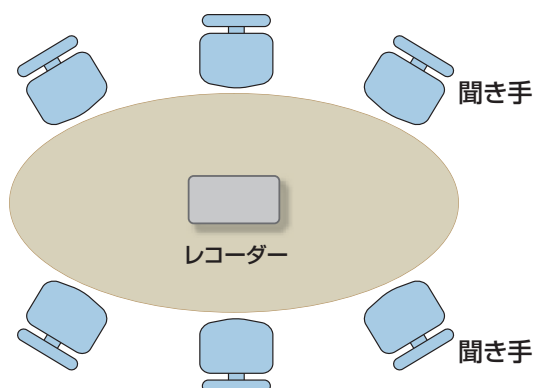
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集

※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

第24回 防災ポスターコンクール入賞作品

防災担当大臣賞



幼児・小学1～4年生の部

愛知県
だれでもアーティストクラブ 小学3年
山田 麻瑚(やまだ まこ)さん



中学生・高校生の部

石川県
金沢市立鳴和中学校 3年
白石 くるみ(しらいし くるみ)さん



小学5・6年生の部

静岡県
森町立宮園小学校 6年
高木 和人(たかぎ かずと)さん



一般の部

新潟県新潟市
深澤 三奈美(ふかさわ みなみ)さん

防災推進協議会会長賞



幼児・小学1～4年生の部

愛知県
だれでもアーティストクラブ 幼児
岩川 萌(いわかわ めぐみ)さん



小学5・6年生の部

青森県
八戸市立江南小学校 6年
中村 有里(なかむら ゆり)さん



中学生・高校生の部

岡山県
岡山市立高松中学校 2年
石坂 彌主子(いしざか やすこ)さん



一般の部

新潟県新潟市
福原 さくら(ふくはら さくら)さん



内閣府(防災担当)

〒100-8969

東京都千代田区霞ヶ関 1-2-2 (中央合同庁舎第5号館3階)

TEL : 03-3503-9394

URL : <http://www.bousai.go.jp/km/>

平成20年度防災ポスターコンクール入賞作品より
その他の作品は次のホームページからご覧いただけます。
<http://www.bousai.go.jp/>